

アリストテレスの経済哲学

塩野谷 祐一

(財団法人 家計経済研究所 会長)

哲学的知の起源は古代ギリシャに遡ると考えられている。経済学の起源もまたギリシャに見出される。しかし、経済学における根源への意識は、一般にいわれているところに従えば、経済学(economics)という言葉がギリシャ語の家計(oikos)に関する管理(oikonomia)に発するという程度のものにすぎない。われわれはもっと重要な観念をアリストテレスに見出すことができると考える。

アリストテレスの経済論は、彼の著作『政治学』と『ニコマコス倫理学』に見出される。従来、それらは近代経済学の先駆として評価されるか、あるいは近代経済学と比べて未熟であるとして批判されてきた。このように市場経済論の観点からとらえる解釈とは違って、アリストテレスの議論を非市場制度の経済論として理解することは十分に意味のあることである。アリストテレスにおける良き生・欲望・必要・希少性・交換・公正・価格などの経済に関する一連の概念は、すべて共同体としてのポリス(都市国家)を思考の枠組みとしており、経済とは、共同体における必需品の確保と配分を行う制度化された過程を意味した。いくつかの重要な論点を挙げよう。

第一に、人間の欲求は制度や慣習を前提としており、共同体の基準の下では無限ではない。したがって、有限の資源と無限の欲求との間の緊張・対立の関係から生ずる「希少性」の概念はここには妥当しない。アリストテレスは共同体の維持にとって必要な財の獲得と使用を「家政術」と呼び、それ以上の財の獲得と使用を「貨殖術」と呼び、両者を区別した。

第二に、共同体における価値基準は、「共同体」

における良き生を基本的に規定する。アリストテレスの中に非市場制度の経済論を見出したカール・ポラーニは次のように書いている。「良き生とは、一日中、劇場で感動すること、陪審団に参加すること、交互に公職に就くこと、選挙運動をすること、応援演説をすること、立派な祭典を催すこと、さらには陸戦・海戦のスリルを味わうことである。そして良き生にとっては、市民がポリスの仕事に貢献するための余暇を持つことが必要である」。

第三に、共同体の内部の交易または外部との交易は、共同体の生活を維持するという要請によって正当化される限り、「自然」(ピュシス)に適ったものとみなされる。共同体はあくまでも自給自足を原則とし、けっして無限の快楽の追求や富の蓄積を認めない。共同体における自給自足の方法によって不足するものを、物々交換によって獲得する限り、生産と交換は「自然」に合う。しかし、貨幣が使われるようになると、貨幣を富とみなし、商業的交易を通じて貨幣的利得そのものの追求が行われるようになる。この不自然な行為は抑制されなければならない。

第四に、アリストテレスにおける価格は、近代の経済学が想定するように、需要・供給を「市場メカニズム」を通じて調整するという機能を果たすものではなく、「互酬性」という公正の観点から共同体の生活秩序を守るために必要な交換比率である。価格は、習慣や法律や命令によって与えられる設定価格として存在する。

このように、アリストテレスは「希少性」概念の非存在、「共同体」および「自然」観念の優位性、「貨幣愛」の否定、「市場メカニズム」の非存

在を主張した。われわれはこれらの主張を古代の陳腐な考えとみなすのではなく、むしろそこに多元的な経済世界像の存在可能性を読み取るべきである。それは言うてみれば、経済概念の「アリストテレスの原型」である。

その後の経済学の歴史の中で、一時的には、自己調整的な市場主義思想が時代のイデオロギーとして優位の地位を占めることがあっても、経済運営における自由市場の限界が露呈したとき、共同体的介入主義思想は常に主役として舞台に復帰した。ギリシャにおけるこのような共同体的介入主義のパースペクティブは「管理的伝統」と呼ばれる。ギリシャ以後、アダム・スミスに至るまで、中世スコラ哲学、重商主義、ドイツ官房学などがこの伝統を継承した。近代から現代に入ると、分配の不平等や失業が社会問題化することによって、国家介入の必要性はますます高まった。これらの事例において、市場経済の失敗が貨幣の機能および無限の利得追求と結びついていたことは銘記すべきである。

アリストテレスが「貨殖術」と呼んだ活動は、富を良き生のための手段と見るのではなく、富や財産の増殖を自己目的とみなすものであって、そこには限度は存在しない。貨幣はこのような反自然的な経済活動を促進する元凶であると考えられた。市場経済が未発達であったこの時代にあって、アリストテレスが貨幣経済の必然性とその危険性を指摘したことは、経済学の出発点にふさわしい経済的叡智の発見であった。

このような考え方の基礎として、経済学の対象設定における存在論的特異性が指摘されなければならない。アリストテレスの存在論においては、経済という「実体」は存在せず、経済は人間および人間行為に帰属する「属性」である。経済的知としての経済学は、人間の学としてのみ存在論的に基礎づけられる。アリストテレスの経済哲学の枠組みをまとめてみよう。

第一に、アリストテレスにおいては、「制度」としての経済が孤立的に問題にされることはない。少なくとも「経済・政治・倫理」の三者が、共同体社会の不可分の領域を構成する。いいかえれば、

近代以後におけるように、社会から離脱し独立しそれ自身で運動する経済は考えられない。これを「社会的に埋め込まれた経済」と呼ぶことができる。「経済・政治・倫理」を一体と見る制度的枠組みは、現代の「資本主義・民主主義・社会保障」という「社会統合化パターン」の出発点である。

第二に、経済が社会的に埋め込まれている状態は、社会を制度的に構成する規範的価値の「理念」が経済行為を強く規定していることを意味する。これを「倫理的に規制された経済」と呼ぶことができる。アリストテレスの場合には、その倫理は、共同体の中で人間の機能を発揮する徳（卓越性）優位の体系であった。これは「価値体系化パターン」の最初のものである。

アリストテレスは経済学を政治学の一部とみなしていたので、それを独立に論じていない。すなわち、共同体倫理に基礎を置く経済行為（家政術）の全体系を明示していない。三大倫理基準である「正（正義）・徳（卓越）・善（効率）」に照らして言えば、アリストテレスの経済学は、徳（卓越）の経済を実現する資源配分の理論を展開すべきものであった。彼の「価値体系化パターン」は、共同体のルールが定める「正義」の条件の下で、各人が能力と人格の向上に努め、「卓越」の実現を図ることを求めるものであった。ここには、欲望の最大限の充足を求める「効率」の基準が独立の経済倫理とみなされる余地はない。むしろ「卓越」のための「効率」が求められるのである。

アリストテレスにおいて、「制度」と「理念」との関係は人々の「習性」という概念によってとらえられている。「習性」は「制度」を形成すると同時に、逆に「制度」は「習性」を育成する。「習性」は倫理の基礎的担い手であって、アリストテレスの倫理学の主題である人間の「人柄・性格」と同じものである。そして「習性」が「制度」を特徴づけるほどに安定的であるとき、経済学・政治学・倫理学の総体としての実践の学は、それにふさわしい確固とした基礎を持つことになる。

しおのや・ゆういち 財団法人 家計経済研究所 会長・一橋大学 名誉教授。経済哲学・経済思想史専攻。